



10年後も元気な学会

渡辺晋生¹

「10年後も元気な学会」と言われて、どんなイメージが頭に浮かぶでしょう？ シンポジウムや大会では議論に溢れ、学会誌には論文が賑わい、それらを支えるアクティブな会員がわんさかいる。やはり人が大事でしょうか。しかし、昨年末の155号に記載されている正会員数は200名と、残念ながら143号の巻頭言（江口, 2019）の予測に概ね一致します。コロナ禍で加速した会員数の減少速度は、一旦は落ち着いたようにも見えますが、このままでは2040年を待たずに正会員数が100名を割ります。これではとても10年後に元気な学会と言えません。それどころか、日本学術会議の定める協力学術研究団体の指定も、会員数の要件割りで外れてしまいます。実際にはシニア会員や学生会員もありますのでもう少し猶予はありそうですが、それでも由々しき事態です。

学会を元気にするアクティブな会員。人はいったいどんなところに集まるのでしょうか。魅力的な「内容」「人」「コスト」。テーマパークであれ学校であれ、これら3つの要素を満たすところだと思います。これらの要素を学会に当てはめた場合、「内容」に相当するものの一つは対象分野でしょうか。「土壌物理」これには魅力があると信じています。土の凍結、水田の物質循環、その他諸々、個人的には相変わらず興味は尽きません。温暖化への対策と適応、土壌炭素、有機農業、持続と再生、DX、宇宙探査、社会的にも魅力は十分ありそうです。「内容」には学会誌や学会大会も含まれることでしょうか。昨今の学会誌の企画や大会ポスターセッションの熱気を見るに、ここにも相応の魅力があると思います。「コスト」については学会費や投稿費でしょうか。年会費は正会員で5500円。1000名以上の規模の学会の相場は安くて8000円ですので、これに比べると割安感があります。500名以下の学会で比較すると、実はやや高めに見えなくもないですが、まずは平均的な魅力があると言えると思います。

そうすると、やはり「人」の魅力でしょうか。憧れの研究者、若手のロールモデルになりうるグループ、議論して楽しい近い世代の仲間。これらが形成されれば正のフィードバックもかかり、学会に元気も宿りそうです。そのためにも母数の確保は必須ですが、現状学会員の減少が止まりません。筆者入会時の1999年から25年で300名の減少。身近な同規模の学会と比べても減少速度が速いようにさえ感じます。正のフィードバックを得るための数の確保には、まずは何かもう一つメリットが必要なのかもしれません。論文については、質が等しく投稿費も同じなら、掲載が速い、広く読まれる、誌面が美しい、投稿作業が簡単等はメリットと言えるでしょう。J-STAGEへの登載、TeX化、Editorial Managerの検討等々、よく頑張っていると思います。会員については、頑張ったら認めてもらえる、出版助成、学会賞、旅費や研究費の支援等はどうでしょう。確かにありがたいメリットかもしれませんが、俗物的あるいは刹那的なメリットだけでよいのでしょうか？ そもそも、新規入会を誘うにして、特に対象となる若手研究者が分野に必要な数いるかも問題です。江口（2019）によれば、会員数を増やすあるいは定常を維持するには毎年10名程度の正会員（学生会員ではなく）の流入が必要です。関連分野の博士後期課程進学者や研究職就職者がこれを満たしていればよいのですが、自分の研究室を含め、周りを見渡すと不安になります。研究職を志す学生を増やすために、他大学等の年の近い先輩と話をする機会の提供、所属を越えたオンラインゼミの支援他、学会にできることとは何でしょうか。あわせて、分野や学会誌の魅力を社会や周辺分野に認知してもらう企画も必要かもしれません。10月の総会で将来企画委員長を拝命して以来、委員会ではこんな議論を続けています。

「とりあえず入ってみたらいいんじゃないかな」「入らずに後悔するなら、入って後悔した方がいいよ」。学生時代のサークル勧誘の言葉です。内容とメリットに自信があれば、あとは入ってもらうだけなのですが、学会の現況に当てはめた場合、前提も含め多くの検討とアイデアが必要そうです。以前より巻頭言や編集後記に類似の記事も散見されますが（例えば、登尾, 2023）、広く皆さんからもご意見を聞く機会を近く持ちたいと思います。「10年後も元気な学会」を目指して。

引用文献

- 江口定夫 (2019): 会員数と論文数のこれまでとこれから. 土壌の物理性, 143: 1-3.
登尾浩助 (2023): 会員に有用な学会誌になるために. 土壌の物理性, 154: 1-3.

¹ 三重大学大学院生物資源学研究所